

平成28年度(2016年度) 秋季特別展

古代の港か？ 祭場か？ —五反島遺跡の謎に迫る—

●会期／平成28年(2016年) **10月8日(土)～12月4日(日)**



五反島遺跡第3次発掘調査の現地説明会

南吹田5丁目にある^{ごたんじま}五反島遺跡という遺跡をご存じでしょうか。神崎川沿いにあるこの遺跡は、実はとっても不思議で面白い遺跡なのです。発掘調査によって弥生時代から近世に至るまでの各時代の遺物が大量に出土しましたが、遺跡の大部分はかつての神崎川の川底にあたることから、これら遺物は、言わばごちゃまぜ状態で出土しました。そのため、いつ、なぜここに埋もれたのか、それを検証するのが大変難しいのですが、あるときには港のようであり、あるときには祭場であり、あるときには祈りや供養の場でもあり、そのときどきでさまざまな歴史の舞台を垣間見ることができます。

今回の特別展では、平成25年(2013)に行われた第3次発掘調査の成果を中心に紹介します。この調査で大量に出土した須恵器^{おおがめ}大甕、瓦、貨幣などは、この地が港あるいは物流拠点であったことを想起させます。展覧会をご覧いただきながら、さまざまな表情をみせる五反島遺跡の謎解きに挑戦してみてはいかがでしょうか。

(当館学芸員 高橋真希)

五反島遺跡ってどんな遺跡？

五反島遺跡は、吹田市南吹田5丁目、大阪市との市境になっている神崎川の右岸に位置しています。明治時代の地図をみると、かつてはそこが神崎川の河川敷であったことがわかります。このあたりはもともと、約7,000年前の縄文海進でできた河内湾の海中でしたが、やがて湾内に流れ込む川の土砂の堆積で陸地が形成されていきました。弥生時代から古墳時代にかけて、上町台地から砂州がのびて河内湾は河内湖となります。この砂州の先端の対岸に位置するのが五反島遺跡です。5世紀頃に上町台地の先端に人工的に難波堀江が開削されるまでは、自然地形として唯一、瀬戸内海と河内湖との間の開口部にあたることから九州や瀬戸内海沿岸地域との人や物資の水上交通において重要な場所でした。

五反島遺跡が発見されたのは、昭和42年(1967)に南吹田下水処理場建設現場で地下3～5m付近の土中から土器が採集されたことによります。相当な深さでもあり、当時は発掘調査が行われませんでした。当地の小字から五反島遺跡と命名しました。

第1次調査は昭和61年(1986)のことで、南吹田下水処理場の拡張工事に伴うものでした。調査面積は約7,800㎡で、当時としては市内最大規模の調査となりました。その後、周辺地で調査が行われましたが、明確な遺構や遺物は見つかりませんでした。平成25年(2013)に第1次調査



五反島遺跡第1次発掘調査

の東側50mの地点で雨水滞水池設置工事が計画され、第3次調査が行われました。

第1次調査では、地下5～6mの深さから古墳時代～古代の神崎川の流路と、平安時代に整備された堤防跡が見つかりました。そして川を埋めた土と川底から弥生時代から中世のさまざまな遺物が大量に出土しました。古墳時代の遺物が最も多く出土しましたが、なかには古墳以外のところからはほとんど出土例がない鉄剣や朝鮮半島からの渡来文化を示す韓式土器・陶質土器や移動式竈がありました。また、平安時代には祭祀の場でもあったようで、中国製銅鏡(瑞花双鳳麒麟俊猊文鏡)、儀仗用の鉄鏃の他、鉄斧、刀子、鋤先、鎌など祭祀具と思われる遺物が出土しています。その他には人骨や獣骨もありました。

第3次調査は第1次調査で見つかった川筋の東側の川底にあたるとされ、出土遺物の様相が第1次調査とは少し異なり、7～8世紀の遺物の出土が目立ちました。特に須恵器大甕や瓦が大量に見つかったことは注目されます。また、長さ5～6mほどの木杭が10本ほど横倒しの状態で転がっていて、杭を打ち込んだと思われる小穴もありました。さらに10～数10cmの大きさの石がまとまって出土しました。こうしたことから、いつの時代かの判断は難しいのですが、港湾の護岸施設、橋、栈橋などの建造物もあったことが推測されます。

(高橋真希)



5世紀頃の大坂平野と五反島遺跡

五反島遺跡の謎① 五反島遺跡は八十島祭の祭場か？

五反島遺跡第1次発掘調査で出土した銅鏡（瑞花双鳳麒麟俊猊文鏡）、儀仗用の鉄鏃、鉄斧、刀子などの祭祀具は、どんな祭祀に使われたものなのでしょうか。

発掘調査をした吹田市教育委員会は、当初より、これらの祭祀具は「八十島祭」に関わるものではないかとの仮説を提示してきました。平成14年度（2002年度）の開館10周年記念特別展「川の古代祭祀－五反島遺跡を考える－」では、他の水辺の祭祀遺跡との比較検討を加えてきたところですが、第1次調査から30年を経過した今でも大きな謎として残っているのです。

八十島祭とは、原則として大嘗祭の後に一代一度執り行われる天皇の即位儀礼の一つです。文献では嘉祥3年（850）から約400年間の23例の記録が残っていますが、鎌倉時代以降は執行

の記録がなく、実態が不明な点が多いのです。祭の性格は国土の生成や発展を祈願する祭とする説と禊祓説とがあり、起源についても5世紀説・天武朝説・嘉祥3年説などがあります。祭場は難波津とされますが、後に住吉や熊河尻（比定地不明）で執行された例もあります。

五反島遺跡が八十島祭祭場であるとする根拠は大きく2つあります。ひとつは銅鏡と鉄鏃です。『延喜式』には八十島祭の約50種類に及ぶ祭料が記されていますが、そのなかに「径五寸の鏡」と「矢」があります。五反島鏡の径は16.6cmで大きさがほぼ一致し、儀仗用の鉄鏃は矢に相当すると思われます。いまひとつは、北方1.7kmにある垂水神社の存在です。『延喜式』には八十島祭に奉仕する神として住吉神・大依羅神・海神・住道神と並んで垂水神があげられてます。

五反島遺跡＝八十島祭祭場説を否定する意見もあります。五反島遺跡では人形、銅鈴などの出土がなく、銅鏡と矢のみでは論拠が薄いこと、八十島祭は海に臨んで執行される祭であるのに五反島遺跡は川であること、人骨や獣骨が出土するような場所は宮廷祭祀の場としてふさわしくないなどとするもので、水上交通における安全祈願、渡河点における境界祭祀、堤防構築に関わる地鎮祭などの可能性もあります。また、人面墨書土器など律令祭祀具もわずかながら出土していて、祓の河川祭祀も行われていたのかもしれませんが。

第3次調査においても、鉄鏃や鋤・鎌など祭祀具とみられる遺物の出土がありました。竈も第1次調査で大量に出土したものです。また58枚の銅銭が出土していますが（5頁参照）、『延喜式』所載の八十島祭祭料には「銭三貫文（うち二貫文が散料）」の祭料もみられます。

五反島遺跡は八十島祭の祭場か否か。それは出土した祭祀具の年代や一括性、遺跡の地域性などの詳細な検討によって解き明かされるのです。

（高橋真希）



瑞花双鳳麒麟俊猊文鏡（上）と出土状況（下）

五反島遺跡の謎② はたしてそこは港なのか？

第3次調査の出土遺物の特徴は、須恵器大甕^{おおがめ}、瓦、銅銭^{こうちゅう}（皇朝十二銭）など同じ種類のものが大量に見つかったということです。ここでいう「大量」とはただ単に量が多いというだけではなく、出土した様子をみるとある程度のまとまった状況にあるということが重要です。須恵器大甕や瓦は調査区の東側に集中してみられました。皇朝十二銭も同様に東側に集中していますが、和同開珎^{わどうかいじん}18枚が2つの束にたばねられていたような状態にあり、癒着^{ゆちゃく}したものもありました。別の地点では和同開珎・万年通宝・神功開宝の計28枚がまとまってありました。

この「まとまって大量」ということが何を意味するのでしょうか。2頁でふれたように、この付近には港湾施設があったことも推測されます。川に落ちた原因は、洪水や積載していた船の沈没、意図的な投棄などが考えられますが、これらの遺物はただ川に流出したのではなく、水中に落下したときにもそれぞれがあるまとまりであった可能性があります。

また、祭祀具と同様に個々の遺物についての詳細な分析が必要ですが、甕・瓦・銭はそれぞれが互いに関連するものなのでしょうか。あるいは別々に持ち込まれた品々が港に付設された一時保管的な物流倉庫にたまたま一緒に収められていたのでしょうか。五反島遺跡の港的な性格は、第1次調査でもすでに指摘されてはいるのですが、発掘調査で現れた、これら遺物が水中に没した情景は、さらに大きな謎をもたらしたのです。

大量出土① 須恵器大甕

第3次調査では7世紀から8世紀前半の須恵器大甕が出土しました。完形に復元できなかった破片もあり、その数は21個以上になります。それぞれの甕は、大きさ、形態、胎土、作り方が異なっていて、一括してなのか、ある期間に渡ったのかはわかりませんが、複数の生産地（須恵器窯）の製品がここに集められたと思われ、現在の兵庫県三田市や同県西南部の播磨地域で生産されたものも含まれているようです。

大甕に加えて、須恵器の他の器種も比較的まとまりをもって出土しています。このことから、付近にあった倉庫などの施設に器種ごとにまとめて置かれていたものが洪水などによって流出した可能性もあります。



須恵器大甕出土状況



須恵器大甕

大量出土② 瓦

出土した瓦は、7世紀後半の軒丸瓦が3種類10枚、平瓦・丸瓦が70枚以上、その他に飾り瓦と隅切り瓦が1枚ずつありました。古代において、瓦は寺院や都城・役所など限られた建物にしか葺かれませんでした。河底にあった大量の瓦もこうした建築と関連するにちがいありません。しかし、五反島遺跡周辺では古代寺院や役所の存在はこれまで知られていません。

これらの瓦には屋根に葺かれた痕跡はなく、使用される以前の状態にあります。どこかの寺院で使われるために運び込まれ、再びどこかへ運ばれる途上のものなののでしょうか。五反島遺跡が瓦運搬の中継地点として機能していたのでしょうか。

残念ながら現時点では、この軒丸瓦の同範例はありません。同範瓦があれば出荷地（生産した瓦窯）、あるいは消費地（寺院や役所）が判明し、当時の物流の一端を明らかにすることができるのです。



瓦の出土状況



八弁蓮華文軒丸瓦

大量出土③ 皇朝十二銭

皇朝十二銭とは奈良～平安時代に律令国家によって発行された銅銭の総称です。第3次調査で出土した皇朝十二銭は、全部で58枚あり、奈良時代に鑄造された銭貨では和同開珎が4種22枚、万年通宝が2種6枚、神功開宝が5種27枚で、平安時代のものは隆平永宝1枚、承和昌宝が2枚でした。都城や役所、寺院以外でこれほどの量の皇朝十二銭が一度に出土するのは珍しいことです。

銭貨は、それ自体が作られた目的の第一義は経済や流通に関わるものですが、地鎮祭や水辺の祭祀にも使用されることがあり、祭祀具としての一面も持っています。五反島遺跡の場合、水中から出土した皇朝十二銭は何を意味するのでしょうか。港湾施設を想定すれば物流に伴う経済活動によるものなのでしょうか。それとも何らかの祭祀行為によってもたらされたものなのでしょうか。58枚の銭貨がすべて同時に使われたものではないようですが、これも解明すべき大きな謎のひとつです。

（高橋真希）



皇朝十二銭



和同開珎の出土状況



平成27年(2015)秋、エキスポシティ内に開館したNIFRELは、2016年より当館が事務局をつとめる北大阪ミュージアム・ネットワークのメンバーとなりました。今回は、NIFRELの小畑洋館長に、開館の経緯や魅力などをうかがいました。



小畑 洋(おばた ひろし)
大阪ウォーターフロント開発㈱(現㈱海遊館)に入社し、海遊館の開業当初より飼育係員として勤務。その後、海遊館の付属研究施設・以布利センターの初代センター長、海遊館魚類展示チームのリーダーを経て、現在NIFRELの館長を務める。

中牧館長：まずは、ニフレルのコンセプトや名称についてお話いただけますか。

小畑館長：ニフレルのコンセプトは「感性に触れる」です。子どもの頃、誰もが自然のちょっとした出来事に心惹かれることがあったと思うんですけど、大人になるとなかなか感じなくなってしまいますよね。特に都会で暮らしていると、便利ですが自然や生き物とつながることを感じられずに日々過ぎていく。だから私たちは、生き物の展示を通して、来館者が子どものころに抱いていた感性をもう一度刺激され、「そういえば生き物ってなんかすごいね」って感じることができるような場所にしたいと思い、このようなコンセプトにしました。

中牧館長：コンセプトはどなたが考えられたんですか。

小畑館長：私や飼育を担当するキュレーターたちで考えました。ニフレルの構想を考えた中で、まず何を伝えたいかをまとめることにしたんです。自分たちがずっと続けていく上でどうしたいかってことが大事だと思ったので。地味かもしれないですが、みんなが同じ思いを共有できるコンセプトだなと思います。

中牧館長：では、「ニフレル」という名称はどういった経緯で決定したのですか。

小畑館長：名称はなかなか決まらず、キュレーターだけでなく事務や広報の若手も含めてミーティングをしました。その中で、とにかく響きと可愛さで考えてみましたと出てきたのが「ニフレル」です。最初は、「何ですかニフレルって」って思ったんですけど(笑)。でも、発案者から、コンセプトの中の「～に触

れる」から、ニフレルがいいと思いますと言われて、ああそうかと思ったんです。それに、意外と若いメンバーがいいねと盛り上がってましたね。ちょうどその時、展示のイメージも一緒につくっていたので、いいかもなとも思うようになりました。ニフレルなんて私には絶対出てこない発想だなと思います(笑)。改めて感心しましたし、それぞれ違う感性で考えることってちょっと楽しいなって思いましたね。それに、今回は水族館というカテゴリーにこだわらず、自分たちで発信できるものをつくろうという思いもあったので、新しさを感じさせる意味で、ニフレルが良いていうのがありました。あとは、エキスポシティと同じく、大人の女性にも興味を持ってもらえる施設にしようとも考えました。

中牧館長：もともとは海遊館がベースですよ。水族館がベースでありながら動物園を兼ねるというのはどういった発想だったんですか。

小畑館長：海遊館ってジンベエザメの印象が強いですが、実は陸上動物もいるんですよ。私も、海遊館での最初の飼育担当はリスザルとナマケモノでした。海遊館は環境を再現するというコンセプトなので、陸上、水中、海の底って切り口で展示をしています。陸上もあるので、動物の展示もしています。そんなベースがあるので、私たちには違和感がないですね。生き物のことを伝えるのに、魚類に限る必要はなくて。それに海遊館の展示のテーマが「太平洋とその周辺の地域」なので、それを表現するのに、当然動物がいて、植物や魚、爬虫類もいて。自然と動物園とか水族館の風景が混ざりあってできたというイメージですね。

中牧館長：なるほど。入り口では「いろにふれる」というテーマで色とりどりの魚を間近で見ることができますよね。世界観がガラッと変わる、その仕掛けがすごいと思います。

小畑館長：実は割と単純ですよ。もともと、子どものころから生き物の色や形がすごいなっていう驚きがあるんですよ。そういう意味では、彼らの魅力をわかりやすく伝えるために色や形などで分類しています。それから、美術館の展示手法に影響を受けています。何よりも、展示物を忠実に綺麗に見せようとする美術館のこだわりを感じて、私も生き物たちの魅力を大切に、忠実に表現したいなと思いました。水槽の中って飼育係がつくことが多いので、どちらかというと飼育ベースになっている。そうすると、生き物の健康にウエイトがあって、他は気を

使わないことが多いんです。でも、展示にした時に彼らの魅力を引き出すことを頑張らないとだめだなと考えたんですね。あんなに魅力的で、人がつくるものよりエッジが効いているなっていつも思っています。そういう意味で、彼らの魅力はちゃんと伝えられるなど。

中牧館長：色だけでなく、わざや姿、動きなどもテーマとしてありますが、実際に触れるのが難しいものもありますよね。

小畑館長：「わざにふれる」では、行動の多様性をテーマにしています。人が介す必要があったり、えさを食べるのが1日に1回だったりすると生き物の動きを見る機会が限られてしまいます。なので、キュレーターが表に出て、色々な水槽で解説をしたりお知らせをしています。ある意味、そこでは人も展示生物の一部ですね。でも、まだまだ良くしていかないといけないです。お客様とのコミュニケーションの取り方や、生き物の見せ方など、色々と工夫できるなと思っています。

中牧館長：動物の本来持っている美しさとか姿とかに、間近で接することができるのがすごくいいですね。それから、「うごきにふれる」のエリアには檻がないですよ。びっくりしました。



「うごきにふれる」エリア

小畑館長：実はあのエリアがお客様から一番評価が高いです。実際、普段は対面できない生き物に会えるという楽しさは素晴らしいと思っています。私は元々魚好きなので、水族館があってよかったですが、生き物との間にガラスがあると、どうしてもテレビで見ているような距離感になるんですね。自然で生き物たちを見るとときと全く違うなあと思っていました。例えば、海外では、ある程度離れた場所ではありますがアザラシが浜に上陸の様子を見ることができんです。こちらのほうが伝わるものがありますね。

中牧館長：博物館では、安全面などの問題でガラスケース越しに展示物を見てもらうことが多いですね。

小畑館長：確かに安全面など心配はありますが、同じ空間を共有できるということは非常に大きな意味

があるので、ちょっとがんばってやってみました。動物たちにはいい刺激になっているみたいで、例えば、ワオキツネザルは毛並みも以前よりフカフカになりました。それに、動物同士の関係性がわかったりしましたね。

中牧館長：棲み分けや共生というわけではなくて、特殊な関係のようですが。

小畑館長：互いに距離感を持ちつつも意識しているようです。飼育環境って、退屈環境になることが非常に多いんです。それが問題で、例えば、動物が柵の前でずっとうろうろしている動きは、退屈してストレスに感じている表れなんですね。逆に同じ空間にいる動物たちは、バランスよく刺激し合っています。これはやってみないとわからなかったですね。行動が活発なサルが中心的存在のようで、全体に影響を与えていますね。面白いのは、フクロウは人が危害を与えないことを学習していて、木から降りた時、お客様に背中を向けて、サルのほうをずっと見てるんですね。人が近づいても全然逃げなくて。サルのほうがびよんびよん動くから気を付けないと、と思うようで(笑)。

中牧館長：人は、どちらかというと守ってくれる、と。

小畑館長：どちらかというとそんな感じですね。そんな関係性が非常に面白いですね。日々変化はありますし。動物たちが自分たちの環境で楽しそうにしていると、伝わるものが多いかな、と。

中牧館長：エキスポシティ内にニフレルを開館したきっかけはどういったものだったのでしょうか。

小畑館長：もともと、エキスポシティのプロジェクトに水族館をつくる計画があり、我々も賛同して進出しました。また、海遊館の建て替えなど考えて、ワンプロジェクトから転換するというタイミングだったというのがあります。エキスポシティでは、かつて大阪万博が開催されましたし、魅力的な場所ですよ。それに、たくさん自然があって、いろんな木や花が生きていることを感じられて素敵だと思っています。そんな地域の人に愛される、ここにニフレルがあってよかったねって言っていただきたいですね。それには、地元の方々の感性や特性とか、そういったところとうまくシンクロしていくべきだと思っています。

中牧館長：今後の抱負などをおしえてください。

小畑館長：今、生き物に興味がないお子さんの話をよく聞きます。お子さんだけでなく、親御さんにも興味を持ってほしいですね。人と自然とがつながっていける施設にしていきたいです。多くの人に、自分の感性で「生き物なんかすごいな」って感覚をもってもらいたいです。ニフレルが、世の中に役に立つものとして残ったらうれしいなと思っています。

(2016年7月21日)

秋季特別展「古代の港か？ 祭場か？－五反島遺跡の謎に迫る－」 関連イベント

■オープニングイベント

10月8日(土)午後1時～1時50分
開会式・展示解説
会場／2階 講座室および3階 特別展示室
定員／120人。先着順。当日直接会場へ。

■講演会

10月8日(土)午後2時～3時30分
「古代の淀川水運」
講師／高槻市立今城塚古代歴史館特別館長
森田克行氏
10月29日(土)午後2時～3時30分
「播磨産須恵器の流通と吹田」
講師／元兵庫県立考古博物館学芸員
森内秀造氏
会場／2階 講座室
定員／120人。先着順。当日直接会場へ。

■歴史講座

10月9日(日)午後2時～3時30分
「五反島遺跡の発掘調査報告」
講師／吹田市文化財保護課 賀納章雄
10月15日(土)午後2時～3時30分
「川の古代祭祀
－五反島遺跡は八十島祭の祭場なのか？－」
講師／当館学芸員 高橋真希
12月3日(土)午後2時～3時30分
「垂水・江坂の開発史と五反島遺跡」
講師／当館学芸員 高橋真希
会場／2階 講座室
定員／120人。先着順。当日直接会場へ。

■展示解説

学芸員による展示解説
10月23日(日)午後2時～3時
10月30日(日)午後2時～3時
11月27日(日)午後2時～3時
講師／当館学芸員 高橋真希
会場／3階 特別展示室 ◎観覧料が必要です。

■館長ギャラリートーク

11月3日(木・祝)午後2時～3時
講師／当館館長 中牧弘允
会場／3階 特別展示室 ◎観覧料が必要です。

■鑄造体験

「ミニチュア銅鏡を作ろう
－五反島遺跡出土銅鏡モデル－」
11月13日(日)①午後1時～2時
②午後2時30分～3時30分
11月26日(土)③午後1時～2時
④午後2時30分～3時30分
定員／各10人。多数抽選。
会場／2階 講座室
応募締切／①②10月29日(土)必着
③④11月15日(火)必着

■見学会

「垂水・江坂の古代遺跡めぐり」
10月22日(土)午後1時～4時
定員／50人。多数抽選。
応募締切／10月11日(火)必着

■展示室クイズラリー

11月19日(土)・20(日)午前10時～午後4時
博物館ボランティア有志の会(景品あり、随時受付)
会場／3階 特別展示室

■コンサート

「秋のおわりのコンサート」
12月4日(日)午後1時30分～3時
演奏／紫金山ポップスオーケストラ
会場／2階 講座室
定員／120人。先着順。当日直接会場へ。

鑄造体験・見学会の申込方法／はがきかファックスにイベント名・日時・参加者全員の住所・名前・電話番号を書いて当館へ。

参加費無料。ただし、観覧料が必要なイベントがあります。